

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十九年五月一日発行（毎月一回一日発行）
第十四巻第一号（通巻第一五七号）

鈴



くろっけ

創刊 13周年

第157号

俳句雑誌

GLOCKE

5. 2007

仮
字

品
川
鈴
子

雛くるむ紙には姉の仮^か字^なけいこ

雛納む握手替はりに指撫でて

お先にと妃が箱へ納め雛

市松人形も着替へる花衣



納め難忘れもの無きやと遺影

庭桜逃げぬ野鳥は夫ならむ

春愁の所為か根締めのごらつきは

藤棚の篩を透ける雨の粒

よるべなき帰心をそそる車窓野火

架け橋に三彩灯るたびら雪



玉鈴

吟

愛媛 足利 徹

建国日旗を立てたる家まばら
梅祭り終へれば元の過疎の里
下校の子春一番がよろめかす
教へ子の死亡広告春寒し
野火走る烈しさ吾に今一度

大阪 尼寄太一郎

初曆先づ丸を打つ句会の日
お降りに子の傘立となる茶壺
臍の緒も齡八十除夜の鐘
烏帽子危ふし碧き眼の福娘
校庭に戻る凧始業ベル

兵庫 荒木 治代

宿指せる標傾く雪の里
炬話にいつしか緩む仏頂面
媼等の言ひたい放題炬火撥ねる
民宿に熊の皮敷く談話室
這ひ寄りし児を膝上に日向ぼこ

大阪 池田 かよ

猫ひそむ山茶花垣は散りざかり
着ぶくれて犬を相手のボール投げ
室咲の梅に受診の胸はだく
枯蔓のつなぎ止めたる実の眩し
肩かけはいま膝かけに忌を修す

大阪 石橋 萬里

冬日射す文学館の机・椅子
文士らの直筆の稿あたたかし
閉ぢしまま凍鶴眼玉動しぬ
恋叶ひシヤム猫気品取り戻す
真珠筏ぐいちに揺らす春嵐

東京 市橋 章子

冬桜並木淡淡暮れにけり
マンションの鉄扉鯛の頭挿す
節分の小児病棟鬼は医師
冬満月本音を飲み胃の痛し
街頭芸一曲の間の日向ぼこ

愛媛 今井 忍

校門の冬木母待つつギブスの児
初旅の夫の飲酒は咎めざる
底冷えの城の軋みや古甲冑
着ぶかれて古刹の香煙胸に浴ぶ
人垣に餅搗く寺の檀家衆

香川 齋部 千里

幾世経て享保の雛のなほ若し
厄除の護摩火に遍路身を焙る
一眼を達磨に入れて春を待つ
豆を撒く声す谿間の一軒家
折紙の枅持て子等は豆撒けり

兵庫 浮田 胤子

取り入れし蘭のつぼみの色づきぬ
四川省春に仔パンダ十八匹
豊漁の鯛おいしく節分会
竹馬でお使ひがすき男の子
陽炎につまづく我も老にけり

兵庫 馬越 幸子

色白の肌初役の追儼鬼
赤子泣く追儼の鬼は父なるに
四股踏みて松明振りて追儼鬼
割り木にて仕切る禊の鬼の道
禊の鬼歩む先には清酒撒き

大阪 大井 邦子

立春の二度と開かず勅使門
神木の枝を揺らしてどんど燃ゆ
参道の早梅に皆立ち留まる
豆打ちにどんじりの鬼手を振りて
振舞の湯呑みの底に年の豆

東京 大川富美子

ぬかるみの路地に捨てしよ浅蜷殻
曳売りの掴み量りの寒蜾
姿なき鉢に寒肥ひとつかみ
川の陽を土手にも延べて蓬萌ゆ
宮鳩のふくよかな声春隣

兵庫 岡 有志

豆打てば逃ぐる園長鬼語言はず
翼あるひかり菜の花畑まで
雪像の亀の唇にて鑿休む
雪をもて本丸築く夜の街
天守位す紅白梅の裾模様

埼玉 岡田 章子

鳩潜くメタセコイヤの映る池
寒晴れの遠き筑波に峯二つ
越後より風来る川原路の臺
重なりて奥ほど白し雪の山
谷沿ひの御岳参道笹子鳴く

薬草歳時記

(一五六) スズラン (鈴蘭)

大音悦子

鈴蘭をわかつふたりの歌人に

山口 青邨

スズランは北海道、本州、九州、および朝鮮半島、中国サハリン、東シベリアに分布しています。

山地や高原の陰湿地帯にある林下や林縁などに生え、観賞用にも栽培されるユリ科の多年草です。

わたしの家の小さな庭にも毎年春になると芽を出し、みるみるうちにぎっしり庭の隅を埋めてしまいます。

地下茎が増え、日本では北海道に目立って多く、すずらん娘が有名ですが、これは放牧している馬がスズランを食べて中毒を起こすといけないので刈り取っているだけだと聞いて驚いたことがあります。

芳香があり、かわいらしい可憐な姿からは想像出来ないのですが、根を含む全草が毒草で、特に根と根茎の地下部は毒性が強いのです。

全草は、コンバラトキシン、コンバロシド、コンバラト

キソール、デグルコケイロトキシシン、ロデアサポゲニン、イソロデアサポゲニン、ケイオシド、コンバラサポニンA・B・C・D、ケリドン酸、ゲルココンバラサポニンなどを含まれます。

6月に根を含む全草を採取し、水洗い後、日干しにします。全草の浸液はジギタリス類似の強心作用があり、この作用は全草に含まれる強心配糖体のコンバラトキシンなどによるもので、その生理作用はジギタリスの10〜15倍の強さといわれています。コンバラトキシンの中毒症状は、流涎、悪心、嘔吐、頭痛などで、多量に摂取すると呼吸停止、心不全状態となり死にいたりします。

スズランは強心利尿薬として用いられますが、ラットに対する半数致死量が1mg/kgであり、毒性が強く危険なため、家庭では絶対に用いてはいけなさとされています。

春先の新芽は、アマドコロやギボウシに似ているので注意が必要です。私も時々「野草を食べる会」に参加して、鍋、釜をかついで野山を歩き、植物を採取し洗って調理し食べて大騒ぎの楽しい一日を過ごすのですが、いつも地元元の植物に詳しい方が指導して下さり有難く感謝している次第です。

参考文献 「原色牧野和漢薬草人図鑑」北隆館

「薬草カラー図鑑」主婦の友社

著者略歴 神戸薬科大学卒 勤務薬剤師

スズラン〔スズラン属〕(ユリ科)

Convallaria majalis L. var. *Keiskei* (Miq.)

鈴蘭、君影草

薬用部分：根を含む全草



花



花の断面図



果実

中田
芳子画



芳子
掲

鈴蘭に憩ふをとめ等の肩見ゆる

水原秋桜子

とりすてゝ鈴蘭の香の地に浮く

飯田 蛇笏

すずらんに憩ひ雄阿寒まのあたり

高浜 年尾

すずらんのリリリリリと風に在り

日野 草城

鈴蘭の谷や日を漉く雲一重

中村草田男

鈴蘭の花山塊を川離れ

飯田 龍太

鈴蘭やまろき山頂牧をなす

大島 民郎

鈴蘭や水溢れでるポンプ井戸

皆川 盤水

枕辺に鈴蘭手術前夜なり

品川 鈴子

鈴蘭の香窓辺に便り書く

片野 光子

(ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

こぐらかる西歴和歴二月はや
すべきことべからざること冬ぬくし
神奈川 永塚 尚代

風邪ひいて夫に厨を明け渡す
隧道の果ては青空春の海
兵庫 長谷川としゑ

松の枝吹き飛ばしたる春嵐
輪になりて軍歌を唄ふ春座敷
庭に出て土搔きをれば露のたう
兵庫

定住の老いし野良猫春の雪
襖絵の筆致眺むる京都御所
天竺の破風作に余寒暫し
兵庫 小倉 綾子

春立ちぬ抜け路地あちこち先斗町
生意気にオレと云ひつつ独楽廻し
廃屋を埋め尽くして雪しまく
愛媛 沖 則文

残照に染まり飛び立つ鶴の群
雪の声聞きつ御百度踏みにけり
ゲートボール四温の山河に木霊せり
心地よき旅の疲れや葛湯吹く
東京 片野 光子

寄鍋の湯気聞き役にうさばらし
手袋をまた忘れたり落したり
手遅れの思ひしみじみ木の葉髪
益梅の名札そここ新しく
兵庫 澤浦 緑

沈丁花蕾濃くして天を差し
友訪ふ手植ゑ水仙大束に
水仙花自由にどうぞと角に置き
冬日さす神戸駅舎の貴賓室
兵庫 津田 霧笛

寒行の法華太鼓に犬吠える
祖の墓はどれも海向く蜜柑村
短冊に連綿のかな筆始め
寒晴れの日時計指針少しずれ
兵庫 四葉 九子

枯蔦の壁這う移住収容所
梅園を見上げ見下ろし礎のぼる
春めきて池のまわりも太公望
牡蠣筏かすり模様には日生湾
兵庫 正木 泰子

核家族二つばかりの餅を焼く

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 川合 まさお 〃

*選句は全て 品川鈴子

こぐらから西歴和歴二月はや 永塚 尚代

「こぐらから」とは、こんぐらから、こんがらから、とか乱れ絡まること。西暦はまだしも和暦では年号が不規則に変わり、更には太陽暦と陰暦で農事や行事もある。昔から「二月は逃げる」と言われ、日数が少なく四年毎の閏年が巡ってくるのもややこしい。記憶の方も序々に衰えそうな不安を抱く。

輪になりて軍歌を唄ふ春座敷 長谷川としゑ

久々に旧知の顔が揃った座敷では、寛いで温かい談笑を交わし、やがておのずと輪になって、懐かしい歌を唄いだす。それは小学唱歌でも、演歌や流行歌でも無く、どれも他ならぬ軍歌ばかり。励まし合って死線の淵を越え、共に生き延びた仲間なのでしょいか。

生意気にオレと云ひつつ独楽廻し 小倉 綾子

赤児の頃から知っている子が、いつの間にか独楽廻しが上手で、皆から一目置かれていられるらしい。得意げになまじり粋がって、きざな「俺」などと言いながら腕前を見せている、したり顔の童が可笑しくて、陰で目を細めている肉親。

廃屋を埋め尽くして雪しまく 沖 則文

真冬の青森、下北を思い出された句である。全てが雪に埋まり平らになった雪原を風が巻き上げつつ過ぎて行く。正に此の句の雪しまくであった。暖冬の今年はどうだったのかと下北を思い直す句。雪しまくが好きです。

心地よき旅の疲れや葛湯吹く 片野 光子

此の句の旅は列車等で行く旅でなく、多分名所旧跡を歩

かれ暖簾の掛かった店で一休みした時、葛湯で疲れが癒されたのだと思います。

葛湯吹くで葛湯の温かさ迄わかる句が人好き。

盆梅の名札そここ新しく

澤浦 緑

盆梅というと小さな鉢植えを想像するが此の句の盆梅はかなり古く四百年程前（江戸時代）から咲き続けているらしい。花に因んだ名札が新しく作り替えられている。名札の白さ、墨の黒さが浮かんで来る。花の管理、花の生命力を聞いてみたいものである。

寒行の法華太鼓に犬吠える

津田 霧笛

寒中の寒さに耐える法華宗の修行僧が祖母の家の玄関に立って団扇太鼓に合わせ読経していた姿を思い出しました。団扇太鼓と読経の音が遠ざかっていく、遠い昔の冬の夜が思い出されました。

枯藁の壁這う移住収容所

四葉 允子

一〇〇八年は移住百年だそうです。港を見下ろす事の出来る移住収容所は移民の方達が日本で最後の夜を過ごされた所で、石川達二の蒼氓で有名になった建物です。今ブラジルの日系二世の方々が来日、訪ねられているのではないのでしょうか。飾り気のない句が良かったと思います。

核家族二つばかりの餅を焼く

正木 泰子

餅を焼くの下五で今頃はどんな火で焼くのかと、ふと昔火鉢に金網を載せ餅を焼いた事を思い出す句である。やはりお二人で火鉢を囲んで餅を焼いておられるのかと想像する。何時までもお幸せに。

亥の飛び出すような賀状来る

上原口チエ

飛び出す様な賀状を作って居られる方は、友達から今年はどうな賀状が来るかと期待されていると思います。私も欲しいと思うくらい句となりました。（以下略）